

もってわが国の医事雑誌の嚆矢としてよいのではないだろうか。

(日本大学松戸歯学部)

大槻玄沢と西賓会話

山形 敏 一

大槻修二の編纂した「追遠会誌」(明10刊)によれば、磐水翁著訳書目のなかで、「其名ヲ伝ヘテ其書ヲ存セサル者」七部のなかに、『厚生新編』と並んで『西客対話』を記している。

昭和五十三年日蘭学会が刊行した大槻玄沢の「西賓対話」は「大槻文庫」と「静嘉堂蔵書」の蔵書印があり、静嘉堂文庫の許可を得て復刻したものである。表紙裏には「西賓対話自寛政甲寅至文化甲戌、校合可致事」と記されており、甲寅来貢西客対話、戊午来貢蘭客通弁、壬戌来貢三回対談、文化丙寅蘭人対談記、庚午西賓対話記、甲戌春対話記の六部より成り立っている。

すなわち、大槻玄沢は寛政六年(一七九四)五月四日、五日、商館長(カヅタム) Hemmi, 書記(シキリバ) Ras, 医官(オツプルメイストル) Keller と対談、寛政十

年三月二十五日、商館長と書記は同一で、医官 Retzke と対談、享和二年（一八〇二）三月四日、医官は同一で、商館長 Wardenar、書記 Mak と対談、文化三年（一八〇六）三月二十一日、商館長 Doeff、書記 Gozeman、医官 Feilke と対談、文化七年三月十八日、商館長、書記、医官は同一で、欠席した医官 Feilke は書面で説明、次いで文化十一年三月にも対談しているが、日付と人名は記されていない。

シーボルト著『江戸参府紀行』（東洋文庫87、昭42）によれば、文政九年（一八二六）出島医官シーボルト Franz von Siebold は商館長スチユルレル Joan Willem de Sturler、書記ヨニルガー Heinrich Bürger とともに三月五日（西暦四月十一日）江戸に到着、四月十二日（五月十八日）江戸を出発する間に、幕府及び諸候の侍医たちと面談しているが、大槻玄沢との面談が明記されているのは三月十一日（四月十七日）だけで、「夜のひとときを幕府の医師桂川、通称ボタニクスとある大名の侍医大槻玄沢とともに過ごす。兩名はオランダ人の友でありヨーロッパの学問の偉大な知己である」（斎藤信訳）と記されている。

私の所蔵する『西戊春西賓来朝会話雜記』はシーボルトの『江戸参府紀行』に相応するもので、「土岐針十郎殿膝臈病シーボルト処方」のほか、シーボルトの処方や土岐針十郎初診所見をシーボルト自身が書いたものを貼布し、さらに、商館長スチユルレル、書記ビユルゲルの書いた蘭文をも貼布している。

したがって、本書は静嘉堂文庫所蔵の『西賓対晤』の続編となるべきものであるが、大槻玄沢が文政十年（一八二七）三月晦に「宿疾寒疝大動、又加傷食」のため逝去したため、草稿のまま伝えられたものかと考えられる。

本総会においては本書の内容について考察したいと考えている。

（東北大学）